

親の不在状況と子どもの教育アスピレーション
— 「留守児童」世帯の子どもの分析から—

○夏 天（慶應義塾大学・院）

【問題の所在】

子ども期の家族経験は、教育達成をはじめとして、個人のその後のライフコースを強く規定することが明らかにされている。子ども期の家族経験のうち、最も注目されてきたのが親不在の経験である。日本における研究では、これまでひとり親世帯と二人親世帯の比較がなされることが多く、ひとり親世帯の子どもが教育達成において不利を経験すること、その効果の一部は家庭の経済的要因から説明されることが明らかにされている（余田 2012）。しかし、これらの関連を説明する経済的要因以外の要因については、理論上の指摘はあるものの、経験的なデータを用いた検討はほとんどなされていない。

中国では両親と家計を共にしつつ、両親または父／母の都市部への就労によって長期的に親と別居中の子どもである「留守児童」が多く存在している。先行研究では「留守児童」は両親と同居する子どもに比べて学業上の成績などの不利が指摘されているが（Chen et al. 2009）、そのメカニズムについては明らかにされていない。

そこで本報告は、主養育者（子どもの養育に中心的に関わっている者をさし、両親と別居中の場合には祖父母であることが多い）の教育的関与に着目しつつ、親の不在状況が子どもの教育アスピレーション（希望する教育達成）に与える影響、およびその関連のメカニズムを検討する。

【データと方法】

分析には「China Family Panel Studies」（CFPS）2010 のデータを用いる。CFPS は 2 年おきに中国全土で社会・人口・教育などにおける変化を測定することを目的としたパネル調査である。母集団は中国全土の家族世帯および家族成員であり、層化 3 段人口比ランダムサンプリングによって標本を抽出している（謝ほか 2014）。CFPS は本報告で着目する親の不在状況について、家計を共にする父／母の不在状況と、その理由について尋ねている。そのため、これらの項目を用いることで、父母の就労による不在状況およびその効果を検討することができるという利点がある。

分析対象は両親と家計を共にし、年齢が 10 歳～15 歳かつ学校の寮に住んでいない子どもだけに限定した。親の不在状況は「父不在」「母不在」「両親不在」「両親同居」の 4 つのカテゴリーによって区分した。

最初に、親の不在状況と子どもの教育アスピレーションの関連を検討する。つぎに、親の不在状況と主養育者の教育的関与との関連について検討し、最後に、親の不在状況が主養育者の教育的関与を通じて子どもの教育アスピレーションに影響するかどうかを検討する。分析はすべて男女別に行う（*N*: 男子 704 人、女子 680 人）。

【結果と考察】

親の不在状況が教育アスピレーションに及ぼす効果については、男子においてのみ「両親不在」の有意な主効果が示された（レファレンスは両親同居）。また、こうした「両親不在」の効果の一部は主養育者の教育的関与によって媒介されていた。しかし、主養育者の教育的関与を統制しても「両親不在」の効果は有意なまま維持された。男子においては「両親不在」が、教育的関与を通じての効果とは独立に、教育アスピレーションへの効果を有していた。一方、女子においては親の不在状況と教育アスピレーションの間に有意な関連は示されなかった。

男女で親の不在状況の効果が異なるのは、教育に関する規範の内面化度のジェンダー差に起因している可能性がある。親が不在である場合、女子は「学業をおろそかにしない」という規範を内面化しているため影響が出にくい一方で、男子ではこうした内面化が十分にされていないために、主養育者からの教育的関与が少ない場合、あるいは両親が不在で統制がゆるやかな場合に学業への対応が不十分になり、その結果として教育アスピレーションが低くなるというメカニズムの存在が推測される。これらの結果は、両親の不在が親の「子どもへの関与」や「子どもの統制」といったいわゆるペアレンディングの不足を経由して成績、および教育アスピレーションに影響を与えるという過程の存在を示唆すると同時に、そうした過程が性別によって異なる形で生じることを明らかにしている。（参考文献は報告当日提示します）

（キーワード：家族経験と子どものライフコース、教育アスピレーション、主養育者の教育的関与）